

赤十字

Japanese Red Cross Society NEWS

NEWS

10

OCTOBER 2025
#1025

赤十字NEWS
WEB版はコチラ



C
O
N
T
E
N
T
S

特集

この命を、抱きしめて

徳島赤十字ひのみね医療療育センターの
医療的ケア児サポート

P. 2

TOPICS

“命を救う”を伝え続けた日赤の講習事業
99年目の「救急法」イベント開催

P. 5

連載

LIVE 万博パビリオン

P. 4

けんけつのいま

P. 5

AREA NEWS

〔神奈川〕「かながわ赤十字情報プラザ」
開館15年&来場者3万人記念

〔大分〕「人道人間クロスレッド」が
ショートムービーで登場

／他 P. 6

WORLD NEWS

Together, we must #ProtectHumanity
「人を守る人」を守ろう

P. 8

Present!!

日赤の車載用防災セット

プレゼント!
10名様



詳しくはP.7をチェック! ▶

上のクイズの答えは
a~c 全て

Q 「医療的ケア児」※1の 防災(備え)に必要なのは次のどれ?



a 人工呼吸器のための蓄電器・発電機

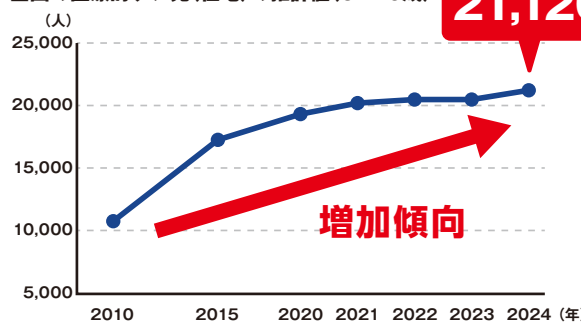
b 避難する際の地域の助け

c 処方薬の注意メモ

※1新生児集中治療室(NICU: Neonatal Intensive Care Unit)等を退院した後も、引き続き、人工呼吸器や胃ろう等を使用し、たんの吸引や経管栄養等の医療的ケア(人工呼吸器による呼吸管理、喀痰吸引その他の医療行為)が日常的に必要な児童のこと。

医療的ケア児は2万人もいる。※2

全国の医療的ケア児(在宅)の推計値(0~19歳)



災害時には、これらの医療行為の「備え」も欠かせません!

医療的ケア児に必要な医療行為

人工呼吸器

自力呼吸困難な児童に対し、
気管カニューレを介して人工呼吸を行う

たんの吸引

気管内や口腔・鼻腔内にたまった
たんを吸引し、気道を確保する

経管栄養

口から食事摂取が難しい場合、
胃ろうや腸ろう、経鼻経管を通じて栄養剤を注入

専用の薬の管理

排便管理

おむつ、消化管ストーマの管理

※2出典: 厚生労働科学研究費補助金障害者政策総合研究事業「医療的ケア児に対する実態調査と医療・福祉・保健・教育等の連携に関する研究(田村班)」及び当該研究事業関係者の協力のもと、社会医療診療行為別統計によりこども家庭庁支援局障害児支援課で作成



日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



日本赤十字社は
2027年に150周年。



古紙パルプ配合率100%
再生紙を使用



環境にやさしい植物油インキを
使用しています

SPECIAL FEATURE

この命を、抱きしめて

徳島赤十字ひのみね医療療育センターの医療的ケア児サポート



①中塚里美さんと真大くん、施設内のお楽しみイベントの際に。「真大と笑って生きたい」が里美さんの一番の願いだった。②幼い頃の真大くんをおぶって世話した看護師の小川純子さん(左)。真大くんは小川さんが大好きだった。二人には、血のつながりを超える心の結びつきがあった。③個別の避難計画には、安否確認の連絡方法から人工呼吸器の使い方、常備薬のリストとその飲み方まで細かく書かれている。④ひのみねにてリハビリを続ける小坂田莞爾くん。⑤「児童発達支援ほっぷ」の様子。重症心身障害のある児童を対象に、日常生活動作の獲得や運動機能の維持・向上などを目的として通所療育を行う。⑥「ほっぷ」では、音楽に合わせて歌ったり体を動かしたりする楽しい時間も。⑦今年5月に行われた災害ディキャンプの様子。いざというときの医療機器の電源確保法や蓄電器とのつなぎ方も学べる。



医学の進歩によって失われる命も減る中で、医療的ケア児の数は増えています。今回は、日赤の福祉事業28施設(児童・老人・障害者福祉)の中から、医療、リハビリ、通所療育、ショートステイなど、多方面から医療的ケアを必要とする人々のサポートを行う徳島赤十字ひのみね医療療育センター(以下、ひのみね)の活動と、ひのみねを利用する家族の思いにフォーカスを当てます。

インタビュー

医療的ケア児とその家族への、地域の包容力を高める



徳島赤十字
ひのみね医療療育センター
園長
かとう しんすけ
加藤真介 先生

私の父も、ひのみねの園長を務めました。家での父は、医師として障害者医療の話題ばかりでしたし、家が近所なので私も日常的に施設で遊んだり、洋服が得意な母の元に手足に障害のある入所者が救わりに来たり、障害のある方々は本当に身近な存在でした。後に私は整形外科医として大学病院に勤務しましたが、幼少期からの思いは変わらず、身体障害者も周りがサポートをしながら共に暮らして行くのが当たり前と思っていました。

ひのみねには、医療的ケア児とご家族が生きやすくなるようにサポートをする役割があります。ご家族は、家庭で多くの苦労を重ねられていますが、中には「この子をちゃんと守るのは私だけ」といったたかな信念で施設に頼ることに抵抗感を持つ方も。しかし、家族だけでケアするのはいろんな意味で限界がある。障害のあるご本人とご家族が共に安心して、生きやすくなるように、私たちの力だけではなく、地域を巻き込んで社会の包

容力を高めていきたいと考えています。近年、私たちが注力しているのは医療的ケア児の災害対策。南海トラフの被害想定では、徳島県の人口の約半数が避難所生活を余儀なくされるとのこと。その備えとして、行政に働きかけ、医療的ケア児のための「災害時対応ガイドブック」を作成して県内に配布し、災害時の自助共助につなげるためのディキャンプを開催しています。住民や民生委員の方々、消防団などにも広く周知を図り、地域全体で助け合っていくきっかけ作りの一環です。また、それぞれの状況に応じた個別避難計画の作成の後押しをしています。

この先も、医療的ケア児とその家族が地域の中で安心して生活できるように働きかけていきます。



災害ディキャンプで避難訓練する参加者

赤十字NEWSオンライン版では地域における医療的ケア児の防災を考えるインタビューも掲載！



インタビュー

ひのみねでのリハビリは、息子に新しい世界を広げてくれます

おさかだ みか
小坂田 美香さん

児童発達支援ほっぷ、リハビリテーションの利用者
かんじ 小坂田莞爾くん(3歳)の母



●莞爾くんが生まれるまで助産師として忙しく働いていた美香さん

息子のかんかん(莞爾くんの愛称)は、先天性心疾患の影響で鼻の気道が狭く、風邪による少しの鼻詰まりでも呼吸困難になります。姉・兄から風邪をうつされるだけで、呼吸器をつななくてはならないほどの危機的状況に陥ってしまうのです。ひのみねとの出会いは、息子がまだ1歳に満たない頃。私がコロナに罹患したことがきっかけでした。「とにかく、この子にはうつしてはいけない」と、掛かりつけの病院に相談し、預かってもらったのが最初です。自宅は遠いのですが、ひのみねが気に入って、1歳になったのを機に、リハビリで通うようになり、その後、施設内の「児童発達支援ほっぷ」も利用するようになりました。伝い歩きや、歩行器を使って自分で移動する訓練、歯磨きの練習などを繰り返すことで、どんどんできることが増えていっています。一時は気管切開をして経管栄養で食事をとっていたため、口からものを食べることを嫌がるようになっていたのですが、先日、兄弟がおやつを食べているのを真似てペロッとお菓子を口にして…、夫と共に拍手して喜びました。

ひのみねのおかげで災害への備えも具体的にできるようになりました。今は経腸栄養剤や粉ミルク、

酸素ボンベなど、最低限のものを備えて、次は電源確保のための蓄電器を準備しているところです。医療的ケア児のための防災を学べるディキャンプも、家族にとってありがたいイベントです。

こういった施設は、ケアを必要とする子どもたちだけでなく、その家族にとっても世界を広げてくれる場。似た境遇のファミリーとの交流も心の支えになります。もっと重症度が高くて発作もある子だと福祉施設が受け入れを断ったり、地域によって医療的ケアの通所事業所が少なかったりするので、本当に支援が必要な重症な方たちこそ、孤立しないように、ひのみねのようなサポートが届くといいなと思います。



●ひのみねの災害ディキャンプに参加した莞爾くんとお父さん。●自宅出産で、お姉ちゃんとお兄ちゃんとの初対面。しかしての後、大学病院へ入院し、人工呼吸管理で治療開始することに。●歩行器を使って自分の力で歩く訓練。伝い歩きで、自力で歩行する練習も行っている。ボールを投げたり、折り紙を折ったりという動作もこなせるように

インタビュー

「息子は世界一幸せな脳性まひ児だった」

そう胸を張って言えるのは、ひのみねのおかげ



●「ひのみねは、息子にとって最も安心できる“家”でした」と里美さん

息子・真大は、26週、わずか886gで出生し、脳性まひと慢性呼吸器不全のハンデを背負っていました。出産直後に車椅子で面会に行くと、保育器の中でタオルに埋もれて見えないほどの小ささ。看護師さんが真大の手を私の指に乗せてくれましたが…手のひら全体が私の人差し指の先端にちよこんと。あまりにも小さくてはかなすぎる姿に、この子に申し訳ないと感情があふれ、泣き崩れました。

それからは、息子を生かしておくことに必死。「この子は私が守る!」という強い使命感で自宅療養を

選択しましたが、何度も容態が悪化し、病院への救急搬送を繰り返す日々。病院の担当医や保健師さんから強く施設入所を勧められ、3歳の誕生日を機に、ひのみねにお世話になりました。

ひのみねでの生活も、最初は「なんで私からこの子を奪うの?」と周りが全て敵に見えていました。でも面会に行くたびに、息子の表情がどんどん明るくなり、笑顔も増えて、「ここに預けてよかった」と思えるように。筋肉の緊張が強い真大のために、担当看護師さんが仕事中でもずっとおんぶして安心させてくれたり、「この子はおまるでトイレができるはず」と、根気よくトイレトレーニングをしてくれたり…。小・中・高と、ひのみね支援学校の修学旅行に参加させてもらったことも、大切な思い出です。実は出生時に「3歳は越えられないかも。そこを越えても小学校入学の夢は見えないように」と医師から告げられました。そんな宣告を覆す、想像もできなかった素晴らしい経験を、たくさんさせてもらいました。

今年の2月、真大が26歳で旅立ったときのことを思い出すと、悲しみだけではなく感謝の気持ちで心が満たされます。あの日の朝、突然危篤状態になり、ひのみねから電話がかかってきました。車に飛び

なかつか さとみ
中塚 里美さん

医療型障害児入所(入院)施設の利用者
まお 中塚真大くん(享年26歳)の母

乗り、慌てて駆けつけると、そこには見たこともない光景が。ちょうど夜勤・日勤交替時の一番職員が多い時間帯で、真大の病室の前には看護師や職員が何十人と詰めかけ、人々が取り囲むベッドの上で、医師が心臓マッサージを繰り返していました。そこから夫が到着するまで心臓マッサージを続け、最後に、私に真大を抱かせてくれました。真大は少しの刺激で体が硬直するので、こんなふうに重みを感じながらしっかりと抱きしめられたのは赤ん坊のとき以来。そのときの真大の穏やかな顔といったら、真大は大好きなひのみねで、お世話になった方々に見守られるタイミングを選んで、そして私がこれから悔いなく生きられるように、私の腕の中で最期を迎えてくれた…。ひのみねに息子を委ねる選択は、間違っていないでした。ここは真大のことを一番に考えてくれる“家”だから、私も安心して彼の第2人の子育てをしながら家事も仕事もでき、面会では真大との時間を思う存分楽しむ、そんな日々を送らせてもらえました。真大は、短い生涯でしたが、最後まで精一杯生き、最高の環境で生活ができて、世界一幸せな脳性まひ児だったと思います。



●真大くんの生前の写真と、亡くなった後に施設スタッフから寄せられたメッセージ。●中塚さんには真大くんが施設で過ごした思い出の写真を集めたアルバムも贈られた。●真大くんは大好きな看護師、小川さんの日勤・夜勤に合わせて睡眠時間を変える特技があった



10月13日
ついに閉幕!

万博パビリオン

このコーナーでは「国際赤十字・赤新月運動館
(通称・赤十字パビリオン)」など万博会場のリアル
な様子を現地からレポートしていきます。



「赤十字パビリオン」来館者アンケートに寄せられた「感動の声」をご紹介します!

館内メッセージウォールの投稿7万4000件、来館後にQRコードからのアンケート回答9300件(9月17日時点)。
今回はアンケートの中からメッセージをピックアップしました。

発達障害であり感情が出な
かったり作文など自分から思った
ことを書けない子が、自らボード
に「かんだうした」と書いていま
した。もう一人の子は10リットルの
涙が出たと表現していました。

【40代】

忘れてしまいがちな大切な
ことを思い出すことができました。

今日一番心が動かされるメッ
セージでした。

できることから始めてみます。

【50代】

「人間を救うのは、人間だ。」
AIの時代ですが、本当に
その通り。 【50代】

We need to have compassion
with one another and help
those in need.

(私たちは互いに思いやりを持ち困っている
人を助ける必要があります) 【20代】

僕もなにか大切な人に
尽くすことを日常から
意識していきたいです。

【10代】

誰かがじゃ無くて自分が、何か一つ
でも行動に移して、世界が少しずつで
も変わってほしいです。 【10代】

2度目です。
しっかり心に刻みたく、
再度入場しました。

【60代】

華やかな国のパビリオンをたくさん見た中で、赤十字
のパビリオンは非常に心に残りました。

世界が直面している問題にも目を逸らしてはいけ
ないと感じました。 【30代】

人間の愛を、形と行動
に現した。素晴らしい。
感動しました。 【70代】



丹青社 ©河野政人

PICKUP! COMMENT



紛争や災害で絶望的な状況に直面し、
希望も未来も見えなくなる。それでも、
同僚や支え合う人々に励まされ、「**今
やれること」「自分にできること**」を一つ
一つ積み重ねる。「**人間を救うのは、
人間**」。この映像を通じ、その思いこそ
赤十字で働く人々の原動力となり、
多くの命と尊厳を守る力になっている
と実感しました。

国連パビリオン 館長
市川 奈緒美さん



映像を見ている間、胸がギュッ
と締め付けられ、息ができない
ほど苦しかったです。涙が止ま
らず、こんなに泣いたのはいつ以
来だろうか、思い出せないくら
い久しぶりのことで戸惑いまし
た。**涙の理由は、無頓着に毎日
を過ごしていることへの自責
自戒の念だと思います。何か行
動したいと思いました。**

三菱未来館
プロトコルマネージャー
三谷 朝子さん



当たり前の日常。普段何気なく
過ごしていると、つい忘れがちで
すが…、**実は、当たり前のこと
なんてなにひとつなくて、すべて
ありがたいことだということに、改
めて気付かせていただきました。**
2つ目のシアターの映像では、震
災当時のことや、そのときには
想像していなかった未来(今)を
思い、さまざまな感情が渦巻き、
涙が止まりませんでした。

三菱未来館
プロトコルマネージャー代理
金居 真由美さん



大きな音にも怖がらず、
最後まで真剣に映像を見
た凧くん。まだ文字が書け
ないので、メッセージウォ
ールではお母さんが書くメッ
セージの横に自分のサイン
を書きました。「**人の助け
になる行動をしたい**」
(凧くんの母 筆)

家族で来館した 凧くん
(千葉県・3歳)



静岡県のJRC(青少年赤十字)加盟高校の生徒ら72人が
パビリオンに来訪。支援に携わる方々の姿を映像で見て、
涙を流す生徒も。「**ニュースの出来事は他人事のように感じ
ていた。実際につらい思いをしている人や、解決に向けて努力
している人がいると実感し、真剣に向き合う意識を持てる
ようになった**」などの感想を述べました。

T P I C S

現在の赤十字救急法は、胸骨圧迫やAEDの使い方を含む一次救命処置や止血の仕方などの応急手当の基本を広く普及しています。

“命を救う”を伝え続けた日赤の講習事業

99年目の「救急法」イベント開催



救急法は「一般の人が、命を失いかけている人を救助する」ために誕生しました。それは、戦争で赤十字が誕生したものと志が同じです。日本において救急法が形になったのは、1887年、帝国大学医学生が、隅田川で溺れた学生を救えなかった悔しさから、ドイツ軍医による教本『普通救急新法』を日本語に訳したことが始まりです。日赤では、1926年に戦争や災害救護で蓄積した救命のノウハウを一般市民に普及することで、一人でも多くの命を救うことを目的に、**救急法を含む「衛生講習会」を開始。現在までに2071万人以上（令和7年3月31日現在）が受講**しています。来年、救急法普及100周年を迎え、今年が

「99（きゅうきゅう）年目」にあたることから、赤十字の救急法指導の変遷を振り返り、改めて一次救命処置の重要性を啓発するイベントが順次開催されます。

9月8日には、救急法にまつわるさまざまな講演を日赤本社で実施。「赤十字救急法の今と昔」の体験会では、救急法のベテラン指導員が現在の人工呼吸「マウス・ツー・マウス法」の手本を示した後、かつて行われていた「シルベスター法」や「ニールセン法」といった人工呼吸についても実演。参加した看護学生が救助役と救助される役に分かれて実践し、救助される役の学生からは「想像していたよりも、呼吸が促されて肺に空気が入る感じがした」といった声が聞かれました。この他、夏祭りで心肺停止になった男性を救った赤十字ボランティアの手に汗握る救命体験談や、武蔵野赤十字病院の救急医・鈴木秀鷹医師による講演「救える命をつなぐために～救急医が伝える一次救命処置の力～」などを通じて、あらためて人を救う原点に立ち、救急法の大切さを見つめ直す機会となりました。

9月9日の「救急の日」に合わせ、赤十字 WEBミュージアムでは**特別企画「99年目の救急法 ～赤十字救急法講習のあゆみ～」を公開**。11月4日から、日赤本社1階の赤十字情報プラザで始まる企画展に先駆けて、赤十字救急法が生まれた契機やこれまでの振り返る数々の資料をご覧ください。

人工呼吸の今と昔

今



現在では、口から肺に空気を送りこむマウス・ツー・マウス法が採用されています

昔

溺れた人がいた場合、胃に水が入っていて吐くことがあるため、すぐにうつぶせにして「ニールセン法」を行っていました

1



救助者は、ひじを伸ばしたまま腕が垂直になるまで腰をあげて、体を前にのり出し体重をかけ、肺から息を吐き出すことを促す。腰をさげながらパッと両手をはなし、両脇からすべらせながら両ひじをつかむ

2



つかんだ両ひじを持ちあげながら、胸を開くようにひっぱり、肺に空気が入り込むことを促す

「99年目の救急法」
WEB特別企画、公開中！



けんけつのいま

支える命、つなぐ未来。 vol.7

このコーナーでは、献血を推進するために各地で行われているさまざまな取り組みを紹介していきます。

Promoting
Blood
Donation

生徒の心に響け！献血「裏方」体験

「献血の血液が患者さんに届くまでには、さまざまな業務があり、見えないところに多くの人が携わっています。**今日は皆さんに、人の命に関わる重要な仕事を体験してもらいますね**」。香川県赤十字血液センターの漆原慎司さんが中学生13人にそう語りかけると、生徒たちは真剣な眼差しで漆原さんの説明に耳を傾けました。同血液センターでは、県内の中学生を対象とした職場体験学習を毎年実施しています。

生徒たちは、まず献血会場での呼びかけや献血者の案内から業務スタート。次に献血する様子を見学し、採血する看護師が行う手指消毒を体験。さらに供給部門では、血液型の特徴や血液製剤がどのように治療に役立つかを学んでから、血液製剤の保

管庫の見学、専用輸送容器への梱包、職員と一緒に運搬車に乗って高松赤十字病院へ納品…。なんと病院では届いた血液製剤のチェックや発注業務も体験しました。盛りだくさんの内容に、参加者からは「**血液の注文システムを操作できたのは印象深かった**」「**血液センターから病院に血液を届けたことに感動した**」などの声が。体験前は、家族が頻繁に献血をする理由を知りたくて参加した生徒もいれば、献血のことを全く知らず友達についてきた生徒もいて、知識もモチベーションもバラバラ。しかし体験後は血液センターの業務に詳しくなるだけでなく、携わる職員の思いや責任の大きさも理解し、献血への意識を大きく変えるきっかけとなったようです。

中学生による
職場体験の様子



タブレット端末を使って輸血用血液製剤を受注



赤十字病院の技師と共に
血液製剤をチェックする生徒(右)



血液製剤の出庫・梱包作業



「かながわ赤十字情報プラザ」 開館15年&来場者3万人記念



日赤神奈川県支部(横浜市)の2階にある「かながわ赤十字情報プラザ」は、赤十字の歴史や日赤の9つの事業などを県民に広く紹介する施設です。2010年に開設し、今年で15年を迎えました。開館以来多くの方々が見学に訪れ、コロナ禍での一時閉館を経て、この度累計来場者3万人を達成! 15年の節目と来場者3万人突破を記念して、9月3日に記念セレモニーを開催しました。記念すべき節目の来場者は、健保連神奈川連合会川崎部会の方々。ハートラちゃんもお祝いに駆けつけ、来場者へ感謝の気持ちを伝えました。同部会代表の板倉和寿部会長は、「保健医療に携わっている立場として、医療や災害救護の最前線で行っている赤十字の活動をしっかり勉強していきます」と語りました。



「人道人間クロスレッド」が ショートムービーで登場



日赤大分県支部のオリジナルヒーロー・人道人間クロスレッド。2022年10月に同支部公式YouTubeに登場し、この3年間で計4話が公開されています。そして、今年9月からは、SNS(Instagram、YouTube)でのショートムービーとして登場。「赤十字の講習普及ヒーロー」としての活躍や赤十字事業を啓発する内容が1分未満の気軽に見られる動画となって戻ってきました。大人気のクロスレッドとおなじみの利己心軍団戦闘員を熱演するのは日赤職員。今後定期的に配信予定なので、ご期待ください!



心を震わせた人道の学び 高校生の宿泊研修



日赤静岡県支部では、8月4日・5日の日程で、青少年赤十字(JRC)高校生メンバー研修会を開催。県内のJRC加盟校から生徒、教員など72人が参加しました。初日は大阪・関西万博の「国際赤十字・赤新月運動館」を訪問(①・P4参照)。2日目は、午前中に兵庫県神戸市の「人と防災未来センター」を見学しました(②)。ここでは、阪神・淡路大震災の記録や復興に向けた取り組みを学び、防災・減災の備えの必要性を改めて実感する時間となりました。午後からは、大阪赤十字病院へ。ガザ地区で医療支援に従事した助産師による講話を聴講しました。現地の医療現場の実態や苦労などのエピソードを聞いた参加者は「感極まりながら話されている様子が印象的でした。人の命をもっと大切にすべきだと感じました」と感想を語りました。



子ども救護班が活躍! 赤十字のお仕事体験会



日赤京都府支部では、8月3日にイオンモール久御山で開催されたお仕事体験イベントに、京都府赤十字血液センターと共に参加しました。各回定員16人・計4回の体験会は、事前予約で満席となり、多くの子どもたちが赤十字の仕事を体験しました。

冒頭では赤十字の活動について学び、その後、救護活動には欠かせない無線の練習をしました。子どもたちそれぞれが救護隊員となり、「夏休みにしたいこと」を

本部に無線で報告。また、段ボールベッドの組み立てにも挑戦しました。8人1組となり、制限時間5分での組み立てにチャレンジ。全班が見事にクリアし、完成後は実際に寝心地を体験しました。最後は救急法の実践。お父さんお母さんが腕にケガをしてしまった想定で、三角巾を使って手当てをしました。保護者からは、「しっかり固定されている!」と感心の声が上がりました。その他、血液センター側のブースでは、献血の受け付け体験も行いました。



夏休み+赤十字、といえば、トレセンだ! 今年も全国各地で開催



日赤の各県支部では、毎年夏休みの時期に、青少年赤十字(JRC)の教育プログラム「リーダーシップ・トレーニング・センター(トレセン)」を実施します。集団生活を生徒たちが自主的に運営し、これから起こることを予測して行動する「先見」や、指示されて動くのではなく、生徒自身の自己管理を促す「号令のない生活」をしながら、人を思いやる心や問題解決能力を高めます。

岡山県支部では、8月5日・6日にトレセンを開催。特別史跡の旧閑谷学校の敷地内にある岡山県青少年教育センターを会場にし、高校生のJRCメンバー12人が参加しました。初日は、赤十字やリーダーシップについて学ぶグループワークと、大分県のJRCメンバーとのオンライン交流会を実施。岡山と大分、それ

ぞれの文化や風土、名物や特産品等の郷土の魅力について紹介し合いました。2日目は、フィールドワークやワークショップを実施。赤十字クイズや指先を使ったドローイング、閑谷学校の史跡を題材にした俳句などに挑戦しました。(①)

奈良県支部では、8月7日・8日の日程でトレセンを開催。集団生活を通してリーダーシップを養うきっかけを得、学校や地域社会で活躍していく児童・生徒の養成を目的に、27校48人のメンバーが参加しました。1日目は、赤十字の理念や身近なものを使った応急手当を学んだ他、共同作業で試行錯誤しながら行うアクティビティを。2日目は、フィールドワークを実施。グループを編成し、初日に学習した内容を含む課題を解決しながら、仲間と力を合わせ

てやり遂げました。最後にはメンバーから「2日間食事を作ってくれた奈良市地区赤十字奉仕団の皆さんへ感謝を伝えたい」と申し出があり、お礼の手紙を作成。同奉仕団委員長へ、手渡されました。(②)

栃木県支部では、8月7日から9日にかけて、とちぎ青少年センターと栃木県青年会館を会場に開催。今回は中学・高校合同で、中学生34人、高校生26人が参加しました。フィールドワークのひとつに、複数人のグループで目隠しをしながら、ロープなどを頼りに20メートルほどの道のりを歩く「暗夜行路」があります。目の不自由な人の不安や感覚を体験するとともに、仲間からの声のサポートを受けることで信頼関係の大切さも学びました。また、中高合同ならではの交流も行われ、有意義な3日間となりました。(③)

国内災害義援金 受け付け中

静岡、鹿児島、沖縄など、台風・大雨災害の被災地の方々を支援する義援金を受け付け中です。

詳しくはこちら



常任理事会開催報告

令和7年9月19日、令和7年度第5回の常任理事会が開催されました。今回の常任理事会では、被爆80年におけるICRC総裁と日本赤十字社社長の核兵器廃絶に向けた共同声明、日本赤十字社創立150周年プロジェクトにおける将来構想懇話会の設置についてそれぞれ報告しました。

PRESENT!!

“日赤トリビアクイズ” に答えてプレゼントを当てよう!

Quiz

Q. 1890(明治23)年、日赤は戦時のための「救護員(主に看護師)」養成を開始しました。その養成科目の中に、必ず入っていたのは次のどれ?

ア:救急法 イ:英語教育 ウ:食品衛生法

ヒントは右の二次元コードから▶▶▶

プレゼント

10名様に
当たる!

日赤の車載用防災セット

非常用トイレ、長期保存水など車に常備しておきたい防災アイテム16点がこの1箱に!

日赤サービス
nisseki service Co.,Ltd.

オンラインショップは
こちら

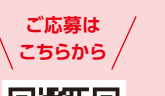


赤十字NEWSオンライン版はコチラ▶

赤十字NEWSはWEBでも閲覧できます。ぜひアクセスしてください!



プレゼント希望者は右の2次元コードからご応募ください。
応募締め切り:10月31日(金)
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます



ご応募は
こちらから



8.19
世界人道
デー

Together, we must #ProtectHumanity

「人を守る人」を守ろう

2024年から今夏にかけて、赤十字の人道支援活動中に命を落とした職員およびボランティアは50人以上。国際赤十字と各国赤十字・赤新月社は、人道支援活動が大きな危険にさらされている現状を危惧し、8月19日の世界人道デーに合わせてメッセージを発信しました。今回は、殉職した赤十字の仲間についてお伝えするとともに、その友人の声もお届けします。

ジュネーブ国連本部で追悼式
国際赤十字もメッセージを発信

2003年8月19日にインド・バグダッドの国連事務所本部が爆撃され、**人道支援関係者22人が命を落とした**のを機に、**国連はこの日を「世界人道デー（World Humanitarian Day）」と定めています**。今年、国連は世界人道デーに、ジュネーブ本部で追悼式を開催。職務遂行中に犠牲となった人々を追悼し、人道支援者の貢献を称えました。2024年に人道支援者の犠牲は史上最悪となりましたが、2025年はさらに深刻化する恐れがあります。

国際赤十字もまた、世界人道デーに合わせて公開されたWEBサイトで、赤十字の活動中に命を落とした仲間を悼み、その人物像や友人の声を届けました。

今年6月、紛争が激化するイランで活動していたイラン赤新月社（以下、イラン赤）のキアヌシュ・ファラヒさんは、捜索救助犬の調教師として、救助犬・ジロと一緒にテヘラン西部で救援活動中に、仲間が犠牲となる場に居合わせました。

「救助活動中にも空爆があり、私たちは強力な衝撃波に揺さぶられました。私は怖がるジロを安全な場所に移動させ、救助活動を続けました。高速道路沿いに仲間の救急車が停車し、仲の良い同僚のモジタバ・マレキともう一人の同僚が車の近くに立っていました。私は彼らに挨拶し、歩み寄ろうとした瞬間に爆風に投げ出されました。その救急車が攻撃を受けたのです。私はやっとの思いで立ち上がり救急車に駆け寄りましたが、モジタバの姿を見つけることはできませんでした。私はただただそこに立ち尽くし、泣くしかありませんでした」

このとき攻撃を受けた赤新月社の救急車

は、紛争で死亡した救急隊員を追悼するために、今でもテヘランの中央広場に置かれています。国際人道法では、医療施設、救急車、医療・人道支援者は紛争下において保護すべき対象と定められています。**赤十字・赤新月の標章（マーク）は保護対象を示すものであり、それを掲げて活動する物・人を攻撃することは国際人道法違反です。**

人道支援継続の危機
人を守る人が、守られない

6月はモジタバ・マレキさんの他にも、立て続けに4人のイラン赤スタッフとボランティアが人道支援中に犠牲になりました。彼らは、武器を持たず、担架や医療キット、そして、人々の希望を運んでいました。また他の地域でも、この1年ほどの間に、次のような方々が犠牲になりました。

オマル・マンスール・イスリームさん

所属：ガザ地区・パレスチナ赤新月社

活動内容 ガザの住民への医療・救急支援

状況 2024年8月、赤新月標章を掲げたパレスチナ赤新月社の建物が夜間攻撃を受け、死亡。

イマン・アッバスさん

所属：スーダン赤新月社

活動内容 避難民の衛生改善支援

状況 2024年2月、市場で清掃ボランティア中に砲撃を受けて死亡。



©IFRC

建物のがれきの下に閉じ込められている生存者を探すキアヌシュ・ファラヒさんと救助犬ジロ



©IFRC

テヘラン中心広場に展示されている、攻撃を受けた赤新月社の救急車と、犠牲になった救急隊員のポートレート

アト・ホネレグン・フエンタフンさん

所属：エチオピア赤十字社

活動内容 救急搬送

状況 2024年8月、救急車で搬送中に武装集団に拉致され、解放後に病院で死亡。

2024年に最も多い18人の犠牲者を出したのは、ガザ地区で避難民の救助活動を行うパレスチナ赤新月社でした。次がスーダン赤新月社で、激しい紛争により8人のボランティアが命を落としました。スーダンでは8700人以上の赤新月ボランティアが紛争下で負傷者の救助や避難支援に従事し、命の危険にさらされながら活動しています。また、今年になってからは、3月にガザ地区でパレスチナ赤新月社の救急隊員が銃撃されました。保護の標章＝赤新月マークを付けた救急車で負傷者を搬送中に攻撃され、救急隊員8人が死亡しました。このガザでの攻撃に対し、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）と赤十字国際委員会（ICRC）は共同声明を発表し、**「人道支援者への攻撃は、救いを求めるコミュニティへの攻撃である」**と強く非難しました。

国連の報告によると、2025年現在、世界中で人道支援を必要とする人の数は3億500万人にも上ります。人道支援に従事する人々が犠牲になることによって活動が継続できず、支援を必要とする多くの人々が絶望の淵に立たされることがないように、赤十字はこれからも、人道支援者の安全と保護を強く求めるとともに、広く連帯を呼びかけていきます。



©ICRC

避難民支援をするスーダンのボランティアは「傷だらけの人、子を失った親、つらい話ばかりです」と語る